

魂の自然史

ブロイラーの要素心理学と——二人の巨人はすれ違ったのか

Naturgeschichte der Seele, 1921 : le monisme mnémique de Bleuler, entre l'éloge d'Ey et la critique de Jaspers

松石 竹志 Takeshi Matsuishi, M.D., Ph.D. · 横浜基礎研究所 · 全三回のうち第三回（九〇分・質疑一五分を含む） · 二〇二六年九月

Argumentum — 本日の論旨

アンリ・エーは一九四〇年の講演で、ブロイラー『魂の自然史とその意識化。要素心理学』（1921 年）を「フランスでは統合失調症に関する著作よりもさらに知られていない」書物として詳述し、著者自身が統合失調症論文より高く評価していたと証言した。エーの評価は「本質的に原子論的・連想主義的で、要するにさほど興味深いものではない」という譲歩から始まり、「しかしブロイラーの一元論はそれでもなお明確に動力学的であり、精神を脳に還元するというよりはむしろ、精神を脳の組織化そのものに浸透させるものだ」と結ばれる。他方ヤスパースは『精神病理学総論』で、ブロイラーの構想からは「理念の図式は得られても、現実の認識の探究可能な対象は得られない」と断じた。ただしヤスパースが名指すのは『精神様体』（1925 年）である。エーが評価した書物とヤスパースが批判した書物は、はたして同じものなのか。

この問いに答えるために、本日は一九二一年の一冊を最初から最後まで読む。四部構成——心を知る手段、中枢神経機能からの意識の導出、心的装置の解剖、人生観・世界観——を順に辿り、そのうえで二つの評言を本文に突き合わせる。

本講演の実質的な収穫は三つである。第一に、連合弛緩において緩むのは連合ではない。緩むのは連合を選択する切替であり、本書で *Lockerung* の語が宛てられているのはまさにその切替の緊張である。第二に、ヤスパースが精神様体の内容として挙げた三項——記憶の諸機能、統合、構造と力の合目的性——のうち前二項は一九二一年にすでに完全な形で存在し、第三項のみが明示的に禁じられている。第三に、したがって一九二五年が加えたのは新しい素材ではなく、素材の統合と、目的性に対する態度の転換であった。二人は同一の思想の二つの段階を見ており、その評言は擦れ違ってはいないが、重なってもいい。

一 書物の位置 *Cardo operum*

ブロイラーの著作は、日本では事実上『早発性痴呆または統合失調症群』（1911 年）の一冊に代表させられてきた。しかし彼が体系として構想していたのは五つの著作の連関であり、『精神医学教科書』（初版 1916 年、第 3 版 1920 年）が臨床の全体を、本書『魂の自然史』（1921 年）が正常心理学の基礎を、『器質的發展の原理としての精神様体』（1925 年）がその生物学的拡張を、『機械論・生氣論・記憶論』（1931 年）が方法論の総括を担う。本書はこの列のなかで蝶番の位置にある。教科書 A 章「心理学の手引き」が扱った主題——記憶、連合、情動性、自閉的思考——を、臨床の必要から切り離して要素心理学として展開し直したものであり、副題の「要素心理学 (*Elementarpsychologie*)」がその宣言である。

扉の次に「わが妻ヘートヴィヒ・ブロイラー＝ヴァーザー博士に」という献辞が置かれる。序文の第一文が方法

をひと息で言い切る——「この研究全体は自然科学的なものである。すなわち、外と内との観察を求め、それらを説明的な連関のうちにもたらそうと努めるものである」(S. 1)。続く一句が、本書のあらゆる哲学批判の源泉となる。「*Das Glauben hat neben dem Wissen, nicht darin, seine hohe Bedeutung und Existenzberechtigung.*」——信は、知の傍らにおいてこそ、その中においてではなく、高い意義と存在権をもつ。両者を混ぜ合わせれば、知は偽造され、信は貶められる。

研究対象を「魂」でも「精神」でもなく *Psyche* と呼ぶのは、前二者に付着した形而上学的な重荷を避けるためである。そしてこの序文の最も重要な一步は、*Psyche* を「意識されたもの」と定義することの拒否である。意識は因果的全体の不規則で偶然的な断片しか含まないか

ら、因果的理解をめざす科学にとっては使いものにならない。ゆえに無意識も等しく考察に入れねばならない。

第一部の哲学批判は、精神科医の筆になるものとしては異例に激越である。哲学はツィーエンの言う「体系の墓場」しか生まなかったが、その墓場では殺された体系が亡霊として歩き回り、一方は百度目の殺害を、他方は蘇生を試みている。哲学と自然科学の混合は「ニンニクとチョコレートの料理」であり、ヘーゲルが火星と木星のあいだに惑星はありえないと「理性的根拠から」証明したのがケレス発見の二年後だった、という挿話が警告の

二 意識の導出 *Ableitung des Bewußtseins*

「心は脳機能である」——この命題を巻頭に掲げねばならないこと自体が奇妙だ、とブロイラーは書く。証拠は列挙される。心的能力の複雑さは神経節と脳の複雑さと平行すること。精神的形質が身体的形質と同じ仕方で遺伝すること。病理においては粗大な解剖学的変化に記憶と連合の障害が、微細な障害に微細な障害が対応すること。介入としては、クロロホルム、頭部打撲、露出した脳への圧迫（発語が途中で止まり、圧を解くと中断点から再開する。止められていた時計仕掛けのように）、アルコール、甲状腺製剤、性腺の摘除と移植、飢餓。しかし最も重要な論拠はこれらの経験的対応ではない——「中枢神経機能の諸法則が心の諸法則であり、その逆もまた成り立つ」（S. 25）。

誰も中枢神経機能と心的機能との境界を近似的にすら示せない。「物的なものと心的なものとのあいだには、過程においても装置においても、いかなる質的差異も現れない。我々が知っている差異とは、立場の差異であって事象の差異ではない」（S. 30）。「境界が見出されるのは、光の振動と網膜の刺激状態とのあいだ、遠心性神経の興奮と筋の収縮とのあいだ等々であって、中枢神経系の機能と心とのあいだではない」（同）。第一回で扱ったエーの「器質—臨床間隔の原理」と、ここは正面から交差する。エーは器質と臨床のあいだに介在するものを見出したが、ブロイラー自身は、境界はもっと外側——感覚器と外界との接面、および中枢と筋との接面——にしかない、と言っている。

導出は一つの思考実験から始まる。突かれて飛ぶ石には記憶がない。ゆえに現在しかない。比較の場所が存在しないから「別の場所」に来ることは決してなく、変化も、運動も、原因も存在しない。仮に意識と思考能力を

札として掲げられる。ただしこれは単なる悪罵ではない。彼は自説への反論を正面から引き受けている——「一人の同僚が、魂と身体の同一性についての私の見解全体は、確実に証明されていないのだから形而上学だ、と難ずる。それは正しくない。……この問題において重要なのは推論のより大きなあるいはより小さな確からしさではまったくなく、推論の仕方である」（S. 9、註）。ブロイラーは自分の同一説が仮説にとどまることを認めている。彼が主張するのは結論の確実性ではなく、その結論に至る手続きが物理学や生理学の導出と同種のものだ、ということである。

与えられていたとしても、原因の時に結果を、結果の時に原因を現在としてもたないから、因果を知りえない。逆に、先行する瞬間が記憶痕を残し、それが次の瞬間になお賦活されていれば、二つの状態が同時に存在し、差異・比較・変化・「知覚の落差」が生じる。ただしこれには、喚起された機能と現勢の機能とが一つの統一へ融合することが条件である。意識の条件は記憶と機能的統一の二つだけである。

そこから本書の最も鋭い定式が出る——「意識をもつのは生物でもなければ脳でもなく、中枢神経機能の複合体である。思惟する実体（*res cogitans*）は存在せず、思惟する機能（*functio cogitans*）が存在する」（S. 41）。デカルトの定式は三段に遡行される——「私は記憶する、ゆえに私は変化する。私は変化する、ゆえに私は比較する。私は比較する、ゆえに私は思考する。私は思考する、ゆえに私は在る」（S. 47）。記憶とは孤立した出来事の列ではなく、皮質の最初の機能から死に至るまでひとつながりに紡がれる「ただ一つの未加工の記憶痕」である。ゆえにあらゆる新しい体験は自我の変化であり、並走する第二の曲線ではなく一本の連続曲線の変形である。

本書には、著者自身が認める空隙が一つだけある。「諸質はどこから来るのか。なぜ自我に連合する音刺激は音として、光刺激は色として内的直観にもたらされるのか」（S. 54）。ブロイラーはこの問いの前で自分が無力だと率直に述べ、しかしそれが誤った問いだとも解決不能だとも証明できない、と付け加え、「それが正当であることを証明せずに、高慢な『我々は知りえないであろう（*Ignorabimus*）』を口にしてはならない」と結ぶ（S. 58）。序文には予め断りがある——「たとえば私の意識

化の説明が受け入れられないとしても、その事情は他の論述を何ら疑わしくするものではない。答えるべき問いが一つ多く残るだけである」(S. 3)。

統一を担いうるのは物質ではなく機能である。「そのような統一をなしうるのはおそらく機能のみ、エネルギー形式のみであろう。……しかしこの要求を神経現象の説明のために立てるのか心的現象の説明のために立てるのかはどちらでもよい。要求はまさしく同一である」(S. 62)。なお意欲の同時的統一については、ブロイラーは理論家の主張に反してそれが決して完全ではないと言う。拮抗する欲動対は、拮抗筋と同様に心の調節にとって必要である。統一が成立するのは一つの傾向が全「切替」を支配する場合にかぎられ、統合失調症では、この本来不完全な統一がしばしば完全に引き裂かれる。統一化が系統発生の目標だとすれば、人間はその終点ではなく出発点に立っている (S. 65)。

三 記憶論 *Mnemismus*

記憶痕 (*Engramm*) の三条件は、体験が変化を置くこと、その変化が持続すること、一定の条件下で再び作動しうることである。体験されたものはすべて——意識的であれ無意識的であれ、注意を伴おうと伴まいと——記憶痕として固定される。想起できないのは記録の限界ではなく喚起機構の問題である。術語がゼーモンに由来することは S. 81 の註に「*Nomenklatur nach SEMON.*」と明記されている。

証拠として真っ先に挙げられるのは、神経をもたない生物における学習である——「ラッパムシとツリガネムシという、神経をもたない生物は、同じ仕方で繰り返し餌を与えられると、摂取に至る運動を短縮する」(S. 81)。そして記憶痕という概念それ自体は理論的に中立だとされる——「脳生理学的でも心理学的でもない。それは、体験によって一つの変化が置かれ、その変化がその体験と同じあるいは類似した経過を容易にしあるいは可能にする、という事実の表現にすぎない」(S. 82)。

第二部 J 節は、本日の判定にとって決定的である。ブロイラーはまず汎心論を明示的に斥け、意識は「当該の器官が存在するときに現れる機能であって、それ以前には萌芽としても存在しない。新しいものは複雑さのうちにある」(S. 66) と述べる。ところがその直後に三段が踏まれる。「神経系より古い装置もまた意識を生み出しうるのではないか。神経とは結局、原形質に固有の能力の特殊化にすぎないのだから」(S. 67)。「そのために脳が要るだろうか。記憶痕と体細胞の伝導能力とでは足りないのだろうか」(S. 69)。そして再生現象を論じた註で——「各々の細胞は、他のあらゆる細胞のうちで何が起きているかについて何らかの知らせを得ていなければならない。……これらの知らせは何らかの仕方で、心の全体表象および目的行為に類比的な何かへと統合されねばならない」(S. 69、註)。これは、名前を欠いた精神様体にほかならない。ただしブロイラーはこれを一貫して「可能である」「排除できない」という様相のうちに留めている。

読み違いやすい箇所。同じ頁の「心的記憶もまた中枢神経系の機能である」(S. 82) を、記憶の適用範囲についての言明と読んではならない。これは「心的記憶痕は物的記憶痕と同一である」という同一説 (反・心理主義) の言明であって、記憶が神経系にしか存在しないという主張ではない。同じ頁で記憶痕概念そのものの中立性が明言され、章の冒頭では神経をもたない繊毛虫の学習が証拠として掲げられている。

反射を単なる解剖学的配線と考えるのは誤りである。反射には可塑性があり、それは解剖学的構造ではなく多数の *Neurokym* 機能の共働にのみ基づきうる。反射の可塑性と心の可塑性は原理的に同一であり、両者の差は個体記憶の有無だけである。ここから中間命題が導かれる——「生得的な中枢神経の素質は、特定の解剖学的・化学的組織のうちにあるだけでなく、記憶痕の持参金のうちにもある。同時にこれは、記憶痕が蓄積されたエネルギー (ヴェルニッケ) ではなく、特定の機能への素因であることを意味する」(S. 83f.)。

系統発生的記憶も記憶痕に基づくのであれば、遺伝的形質は記憶痕であり、したがって遺伝子は記憶痕である (S. 85)。この一般化を細胞理論そのものの書き換えと

して定式化したのが、本書中もっとも遠くまで行く註である——「そうなればもはや『すべての細胞は細胞から』ではなく、『すべての細胞は記憶痕担体から (*omnis cellula ex engrammatophoro*)』と言われることになる。そしてそのとき、形成する原理は記憶痕である」(S. 87、註)。これに続くのが、本書の記憶論の範囲を最も端的に述べる一文である——「記憶が生ける原形質の一般的機能であり、それが我々の大脳皮質においてのみ特別な発達を遂げたにすぎないことは、すでに先に強調しておいた。……生命とは、我々がムネーメ的な諸性質から区別することのできないコロイドの諸性質の発現である」(S. 90)。

記憶痕は一度置かれれば、それを担う脳が存続するかぎり持続する。コロイドにおける記銘の変化は不可逆である (S. 91)。「褪色」という通念は誤りで、褪せて見えるのは元の記憶痕ではなく、それを用いて後から作られた表象のほうである。しかし喚起は単なる素因の再賦活で

はなく、そのつど過去の記憶痕を材料とした新しい結合の形成である。したがって記憶像は原体験の複製ではなく「一つの報告」にすぎず、厳密には「反復」も存在しない。「記憶痕はむしろ一枚のパリンプセストのようなものである。それは何度も新たに上書きされる——たしかに同じ語をもって、しかし毎回別の連関において」(S. 99)。

この章の語彙は徹頭徹尾機械論的である——疎通、制止、道、遮断、短絡、抵抗、切替。そして練習とは、新しい連合を置くことであると同時に他の連合を遮断することである——「思考の連合においてと同様、身体的な熟練においても、誤った不要な路の遮断は、正しい路の発見と少なくとも同じだけ重要である。……練習によって人は新しい能力を得るだけでなく、他の能力を自らに閉ざしもする」(S. 98)。エーが「原子論的・連想主義的」と評したのは、この章のことである。そしてその指摘は、この章については当たっている。

四 連合と選択 *Assoziation und Auswahl*

本書の思考論は、連合概念を解剖学から切り離すところから始まる——「連合から解剖学的概念を作り上げるのは、まったく誤りである」(S. 178)。次に、連合の成立がつねに同時に遮断でもあることが述べられる——「連合の成立は単に積極的な何かであるにとどまらず、同じだけ、他の路を閉ざす何かでもある。いかなる習慣づけも、他の方向のあらゆる反応を困難にする」(S. 179)。類似連合は隣接連合の特殊例ではなくその逆であり、しかもその基礎にあるものは心よりも、そして神経系よりも古い (S. 181/182)。

そしてこの節の——おそらくは本書全体の——核心が来る。連合の総体からは、それだけでは思考は生じない。

Aus all diesen Assoziationen aber kann noch kein brauchbares Denken entstehen. Die vorgestellte Rose kann mich auf Dornen oder eine Kamelie oder ein Mädchen [...] und noch auf tausend andere Gedanken bringen. Es muß noch die Auswahl und die Richtung des Denkens bestimmt werden.

しかしこれらすべての連合からは、なお使用可能な思考は生じえない。表象された薔薇は、私を棘へも、椿へも、私が薔薇とともに見た一人の少女へも、さらに他の無数の思考へも導きうる。思考の選択と方向とがなお規定されねばならない。(S. 184)

選択に対して第一に影響を及ぼすのは思考目標 (*Denkziel*) であり、与えられた瞬間に支配している努力 (*Strebung*) である (S. 185)。そしてこれらが連合構造全体に及ぼす作用が布置 (*Konstellation*) であり、切替 (*Schaltung*) である——「この種の切替は、最高次の中枢神経機能の統一の表現であるにとどまらず、まさにその原因である」(S. 187)。全体の定式はこうである——「思考の諸法則は連合の諸法則である。連合の諸法則は喚起の諸法則である。喚起は、その様式と内容においては記銘によって、その選択においては中枢神経系の

生得的な生命維持反応によって規定される。そして記録とは、持続する経験にほかならない」(S. 188)。

要素の集合から統一を組み立てるのが原子論だとすれば、これはその逆——統一の側から要素の振舞いを規定する構造である。エーの「原子論的」という譲歩が当たらないのは、この階層に対してである。

結合には階層がある。概念の内側の結合は概念のあいだの結合よりはるかに堅固であり (S. 176)、事物概念の内

五 弛緩の在処 *Ubi laxatio*

本書で自閉的思考は *dereierendes Denken* と改名されている。その理由を述べた註は記憶されてよい——「私はこれまでこれを『自閉的思考』と呼んできた。……しかしこの名は誤解された(彼の精神病理学におけるヤスパースによってさえ)。そこで私は別の名を提案せざるをえなかった。*Dereieren* は *reor, ratus sum* (*ratio, res, real*) に由来する。……現実から目を逸らす、あるいは現実から逸れる思考、ということである」(S. 191/192、註)。本書のなかでブロイラーがヤスパースを名指しで批判している箇所であり、もう一箇所、「因果的説明／了解可能」の区別を原理的差異とみなす見解への反論もある (S. 215)。二人の応酬は一方向のものではなかった。

この思考が生じるのは、現実が内的欲求を満たしえないところ(神話、呪術、白昼夢、詩)と、連合緊張が減弱しているところ(夢、統合失調症、発熱、いくつかの中毒)である (S. 156)。そして病理と正常を架橋する一文がある——「実際には、いかなる類推推論にも必要とされるあのわずかな、獲得された連合からの離脱から、最も奔放な空想に至るまで、あらゆる移行が存在する」(S. 194)。あらゆる思考は微量の弛緩を含み、統合失調症はその量的極限である。一九一一年の症候概念は、ここで一般心理学の連続量へと組み替えられている。

知能論はこれを裏側から定式化する。良好な心的遂行の第二の要件は「経験によって獲得された連合を必要に応じて解きほぐしうる、ある程度の容易さ」であり (S. 200)、この解けやすさは大きすぎることもありうる(同)。「統合失調症者においては、健常者の夢におけるのと同じく、一つの表象から他の表象への道がもはや習慣と経験によって縛られていない」(S. 202)。弛緩は病理学的異物ではなく、知性そのものを可能にする機能の量的過剰として定義し直されている。

結合の堅固さ＝「解体の考えられなさ」は概念形成と同時に与えられる (S. 177)。ゆえに「夢においては、論理的機能と同様に概念そのものが崩れる。病理においては、論理障害はあらゆる精神病に見られるが、概念の解体 (*Begriffsauflösung*) は統合失調症にのみ見られる」(S. 177)。弛緩の深度が診断単位を分ける、という主張である。

本書に「連合弛緩」という語はない。本書の思考論には *Lockerung*・*gelockert*・*Zerfahrenheit*・*Assoziationsstörung* のいずれの語も現れない。巻末索引の立項も「*Lockerung* 308/9」「*Lockerung der Schaltungen* 308/9」の二つだけであり、いずれも第三部J章「緊張」を指す。ブロイラーは *Lockerung* の語を、連合ではなく切替に宛てている。

その唯一の箇所はこう書かれている——「何らかの力が働いており、それが切替を正しい位置に保っている。その力は克服されうるものであり、ばねの張力のように弛みうるものである。それが弛めば、切替は緩み、他の影響に従い、あちらこちらへぐらつく」(S. 308/9)。ブロイラーはさらに自己批判的な代案を並置する——「弛緩」の代わりに、各観念の切替力が遠方まで届かないと考えることもできる、と (S. 309)。そして、新しい像のほうが把握しやすくて気に入っているが、古い像は数千の症例で検証済みであり、新しいほうはまだ数百でしか試していない、と付け加える。

切替という概念そのものの身分についても、ブロイラーはきわめて明瞭である——「切替という概念はもちろん一つの像にすぎない」(S. 305)。「切替の過程の背後に何が潜んでいるのかは、今のところおそらく誰も知らない」(S. 306)。この自己認識は、後述するヤスパースの批判の可否を測るうえで効いてくる。

以上をまとめれば、緩むものは三層をなす。第一に、連合を選択する切替——その保持力＝緊張が弛む。第二に、経験連合の固さ——解けやすさが過大になる。第三に、概念内結合——概念そのものが解体する。崩れるのは連合の在庫ではなく、在庫のなかから選ぶ力であり、その力は本書において自我の統一そのものの原因とされている (S. 187)。

六 カントの移送 *Kant naturalisatus*

第三部 D 章から F 章までは、認識論の主題を要素心理学の内部で処理する試みである。因果思考は、外から与えられた連関を、心的領域のあらゆる場面で見られるのと同じ類推と抽象によって反復すること以外の何ものでもない。決定的な一節は S. 208 に置かれる——「この後天的な、確実に存在する因果性のほかに、なおもう一つのア・プリオリな因果性を想定することは無意味である。かりに思考の因果形式が生得的であったとしても、我々はそれをふたたび同じ仕方で導出せねばならないだろう——ただし個体の経験と記憶からではなく、種の経験と記憶から。だからといってそれがカント的な意味でのカテゴリーであることにはならない」。

空間についても同様である。刺激そのものには空間的なものも時間的なものもない。ある皮膚点への刺激が反射運動を引き起こし、その運動感覚が新鮮な刺激感覚と中枢で結合する——この結合のうちに空間と時間の要素がある。「空間とは抽象された関係である」(S. 219)。「これらの関係の抽象が時間である」(S. 223)。網膜は外空間を触知するための特殊器官にすぎず、盲人の杖と同じ地位にある。

F 章は本書の認識論的立場を最も凝縮して述べる——「諸傾向（本能、欲動、情動性）と、空の記憶、すなわち記銘と喚起の能力とは、組織のうちに基礎づけられており、生得的であり、望むならばア・プリオリと呼んで

よい。……しかしア・プリオリな『認識』、すなわち脳の組織のうちに存する認識は、存在しない」(S. 228)。カントのア・プリオリは廃棄されるのではなく、超越論的主観から中枢神経系の系統発生的組織へ移送される。典型的な自然化されたカント主義である。

系譜づけの精度について。本書におけるカントの出現箇所は S. 163, 189, 196–199, 208, 215, 229 と多岐にわたり、そのつど論敵として名指される。他方ヒュームは S. 207 に一度だけ、「ヒューム以来、他にも多くの者が因果性を経験から導いているのだから、この程度の示唆で足りるであろう」という片付けの身振りで現れるにすぎない。ロックは固有名として一度も現れず、*Assoziationspsychologie* という語も本書に存在しない。したがって「プロイラーが立つのは英国経験論的受容ではなく大陸側である」という第一回の主張は、本書によって強く支持される。ただし一点だけ訂正を要する——ヘルバルトは本書に一度も名指されず、巻末索引にも立項がない。カントーヘルバルトーグリージンガーという系譜づけは、論証構造の相同性としては十分に支持されるが、プロイラー自身の明示的な自己申告としては裏づけられない。

七 判定 *Iudicium*

エーの評言を検証する。「原子論的・連想主義的」という譲歩は、本書の記憶論に対しては当たっている。第三部 A 章の語彙は徹頭徹尾機械論的であり、合成写真の比喻による概念形成の説明も典型的な原子論である。しかし思考論に対しては当たらない。「これらすべての連合からは、なお使用可能な思考は生じえない」(S. 184) という一文は、まさしく連合心理学の限界の宣言である。エーは本の前半を正しく読み、後半の階層構造を読み落とした、というのが公正な記述であろう。他方「精神を脳に還元するのではなく、精神を脳の組織化そのものに浸透させる」という一句は、本書の要約としてきわめて正確である。プロイラーの一元論が実体の一元論ではなく機能の一元論であること、還元の方法が「心を脳という物へ」ではなく「心も脳も機能へ」であることを、エーは一句で言い当てている。

ヤスパースの三項目録という鍵。ヤスパースは精神様体において束ねられているものを三項目に分けて列挙している——記憶（ムネーメ）的な諸機能、統合、そして構造と力の合目的性。この三項を『魂の自然史』に照らすと、ただちに明瞭な分割が現れる。

ヤスパースの挙げる三項	『魂の自然史』 (1921)	『精神様体』 (1925)
記憶（ムネーメ）的な諸機能	存在する——「生ける原形質の一般的機能」（S. 90）、「すべての細胞は記憶痕担体から」（S. 87 註）、「遺伝子もまた記憶痕」（S. 85）	存在する
統合	存在する——「機能の統一」は意識の二条件の一方（S. 58–66）。神経系に限定されない（S. 69 註）	存在する
構造と力の合目的性	存在しない。明示的に禁じられている（S. 326）	原理として据えられる

批判者が敵対的に作成した目録は、誇張も省略も批判の効力を損なうがゆえに、著者自身の要約よりかえって内容の同定に適することがある。三項のうち二項がすでに一九二一年の書物に書かれていた以上、ヤスパースの批判が実際に相手取っているのは、一九二一年から一九二五年に至るブロイラー後期思想の連続体である。エーが「ヤスパースがこの著作に加えた厳しい分析」と書いたとき、彼が『魂の自然史』を名指したことは、書誌的には不正確であっても、内容的には的を外していなかったことになる。

一九二一年が禁じ、一九二五年が踏み越えたもの。差は第三項に集中している。一九二一年のブロイラーは、生命一般を導く未知の原理がありうることを認め、それを「生物学的な『有用性』を超え出る諸原理」とまで呼び（S. 268）、「生命一般の維持」という「なお一層高次の傾向」を自然の営みのうちに見てとる（S. 242、註）。しかしそれらはいずれも註のうちに、あるいは芸術欲動という周縁的な主題のうちに置かれており、そして何より第四部において目的概念そのものの適用が禁じられている——「目的とは、人間のように意識された目標に従って行為する存在との関連においてのみ存在しうる概念である。……宇宙に、世界秩序に帰することはできない」（S. 326）。一九二一年に許されていたのは「まだ知られていない生命原理があるかもしれない」という認識論的な空欄であって、その空欄に実体名を与えることはなかった。

したがって一九二五年が加えたのは新しい素材ではない。加えられたのは二つ——散在していた素材の統合と、目的性に対する態度の転換である。そしてこの二つは独立ではない。散在していた素材を一つの原理として束ねるという操作それ自体が、束ねられたものに統一的な方向性を、すなわち合目的性を帰属させることを要求する。ブロイラーが一九二五年に払った代償は、まさに一九二一年に自ら課した禁令であった。

判定の身分について。『精神様体』（1925）および『機械論・生氣論・記憶論』（1931）は、いずれも筆者が入手しえていない。前者は冒頭部分がシュプリングアーのサイトで閲覧できるほかに公開全文が見当たらず、書籍としても現在通常の流通経路では手に入らない。後者も同様である。したがって右の判定は、ヤスパースの要約とエーの言及、および一九二一年の本文との対照から導かれた推論であって、原典による検証を経ていない。足場が固いことと検証済みであることは別である。原典が入手できしだい、この判定は書き改められるべきものと考えている。

なお、ヤスパースの「理念の図式であって探究可能な対象ではない」という判定が一九二一年の書物に当たる度合いは限定的である。当たるのは *Psychokym* の諸質の問題（S. 313–315）と芸術欲動節の「イデー」思弁（S. 267–268）であって、それ以外の大部分ではない。しかもブロイラーはヤスパースに指摘されるまでもなく、自らの構成物が図式であることを繰り返し明言している（S. 305, 306, 314, 315, 322, 338）。この自己認識の存在は、両者の対立を「独断的体系家対批判的方法論者」という図式で描くことを困難にする。

結語として。ブロイラーは要素を集めるだけの連想主義者ではなく、選択機構を通じて精神の統一を構想した構造の構築家である。エーとヤスパースは擦れ違っていない。しかし重なってもいない。二人は同一の思想の二つの段階を見て、賛否を述べていた。本書の最終文が、その全体に付された保留である——「そのさい私は、真理が相対的な何かであることを知っている。我々の自然科学的知識の現在の状態にとっては、述べたことをおおむね真理だと考えるが、しかしその真理だとは考えない」（S. 338）。

Bleuler, E. *Naturgeschichte der Seele und ihres Bewußtwerdens. Eine Elementarpsychologie*. Berlin: Julius Springer, 1921; 2. Aufl. 1932. (本講演の分析はすべて初版全 338 頁による。参照した電子版はインターネット・アーカイヴ公開の初版スキャン〔識別子 naturgeschichted00bleu〕。印刷頁 N = 電子版頁 N + 12)

Semon, R. *Die Mneme als erhaltendes Prinzip im Wechsel des organischen Geschehens*. Leipzig: Wilhelm Engelmann, 1904.

Bleuler, E. *Die Psychoide als Prinzip der organischen Entwicklung*. Berlin: Julius Springer, 1925. (原典未見) / *Mechanismus, Vitalismus, Mnemismus*. Berlin: Julius Springer, 1931. (原典未見)

Jaspers, K. *Allgemeine Psychopathologie*. 9. Aufl., Berlin/Heidelberg/New York: Springer, 1973, S. 189. (英訳: *General Psychopathology*, trans. J. Hoenig & M. W. Hamilton, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1997, vol. 1, p. 224)

Ey, H. « La conception d'Eugen Bleuler ». In: Bleuler, E. *Dementia praecox ou Groupe des schizophrénies*. Trad. A. Viallard. Paris: E.P.E.L./G.R.E.C., 1993, pp. 642–658. (『魂の自然史』評は pp. 655–656)

本講演は、松石竹志「プロイラー『魂の自然史』解題——エーの評価とヤスパースの批判は同じ書物に届いているか」『横浜基礎研究所紀要』第1巻(2026)に基づく。

同解題は「アンリ・エーとオイゲン・プロイラー——プロイラーの精神医学体系とその誤解された受容」(同誌論文16)第四章の補遺として書かれた。・ <https://matsuishi-lab.org/bulletin/>